

平成 26 年秋における外来魚生息状況調査結果

臼杵 崇広・佐野 聡哉・幡野 真隆

1. 目的

平成 26 年秋の琵琶湖における外来魚（ブルーギルおよびオオクチバス当歳魚）の生息状況を定点捕獲調査から把握し、外来魚駆除事業の効果を推定する。

2. 方法

琵琶湖沿岸帯（水深 7m 以浅）の 115 定点（南湖 41 定点、北湖 74 定点）において捕獲調査を行った。調査は小型ビームトロール網（ビーム長 4m）を小型動力船で曳網することによって行った。曳網時間は北湖 5 分間、南湖 3 分間とし、曳網速度は 0.27m/sec を基準とした。ブルーギルおよびオオクチバス当歳魚について曳網 1ha あたりの捕獲尾数を求め、平成 19 年以降の結果と比較した。

3. 結果

ブルーギルは捕獲魚の体長から 65mm 未満を当歳魚、65mm 以上 85mm 未満を 1 歳魚、85mm 以上を 2 歳以上魚とした。図 1 に南湖の、図 2 に北湖の曳網 1ha あたりの同種捕獲尾数の推移を示した。平成 26 年秋における同種当歳魚の捕獲尾数は、南湖では 3,060 尾/ha（前年比 211.0%）と増加し、平成 19 年以降では 2 番目に高い生息レベルとなった。北湖でも 796 尾/ha（前年比 328.9%）と大幅に増加したが、平成 19 年以降では 3 番目に低い生息レベルであった。

オオクチバスは、体長が 120mm 未満の個体を当歳魚とし、その曳網 1ha あたりの捕獲尾数を図 3 に示した。南湖では 1,644 尾/ha（前年比 130.5%）、北湖では 795 尾/ha（前年比 131.2%）と増加し、南湖、北湖ともに平成 19 年以降では最も高い生息レベルとなった。

調査の結果、ブルーギルおよびオオクチバスの当歳魚は南湖、北湖ともに増加傾向にあ

り、小型魚からの捕獲が可能な沖曳網などによりなるべく早い段階からこれら年級群を徹底的に駆除することが望ましい。さらに、今後の当歳魚の発生を抑制できるような駆除量が減少している現状にも対応できる、より効率的な駆除技術の開発が必要である。

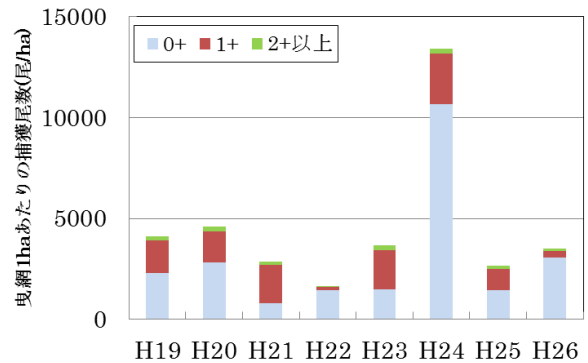


図 1 南湖における曳網 1ha あたりのブルーギル年齢別捕獲尾数の推移

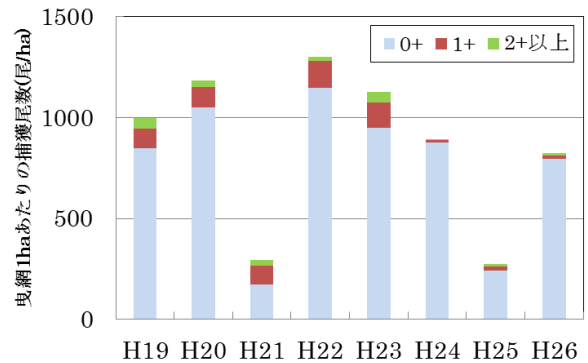


図 2 北湖における曳網 1ha あたりのブルーギル年齢別捕獲尾数の推移

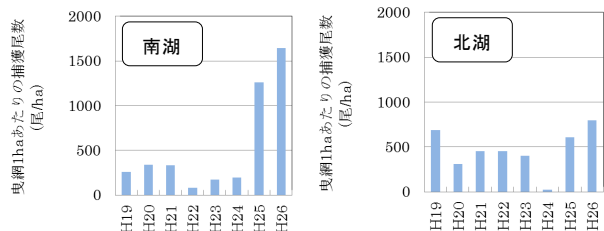


図 3 南湖および北湖における曳網 1ha あたりのオオクチバス当歳魚捕獲尾数の推移